

平安時代の和歌の贈答について

高橋 秀子

【1】はじめに

平安時代には、和歌によるやりとりが盛んに行われていた。口で和歌を詠んでそれが会話になることもあれば、和歌を書いて相手に贈ることもあった。書く時は、字は現代のように一文字ずつ離すのではなく、^{れんめんたい}連綿体、すなわち字を続ける^{てい}体で書かれていた。そして、行の上下を揃えないことが当世風とされていたようである¹。また、ひらがなの「し」の字を長く伸ばして書くことが美しいとされていたようだ。

このように書かれた和歌が贈られる時には、そこに枝や花、葉が添えられることが多くあった。この、和歌に添えられる植物を「^{ふみつきだ}文付枝」²という。金英氏は、「平安朝における文付枝研究——『枕草子』を中心に」³において、文付枝について次のように述べておられる。

それは、まず消息などの文に添える木、草、花のことであり、大半が「つける」「結びつける」という動詞と一緒に用いられている。(中略)さらに、平安時代には〈和歌＋文付枝〉という組合せの消息と同趣の延長線上に、〈文付枝のみ〉贈答されることが頻繁に行われている。この場合、歌や地の文など何も添えられていない植物のことを「文付枝」と名付けるのはやや矛盾するが、これらを相手に贈ることにより、充分相手へ自分の意志や心情を伝達する手紙の如き機能を果たし、次の事件を展開させる重要な役割を果たしていると認められる。従って、「文付枝」と呼称した方がより相応しいと考える。

上によると、金氏は2つのパターンの植物を文付枝として定義しておられる。1つは、消息つまり手紙に添えられる植物である。もう1つは、歌や文を添えられずに贈られる植物そのものである。

しかし、私はここにもう1つのパターンを加えたい。それは、歌が書き付けられた植物である。なぜなら、平安時代の歌集や物語を見ると、花や葉に直接歌を書いて贈る例が多く見られるからである。そこで、金氏の示された定義に、歌が書き付けられた植物をプラスして、これらを文付枝とする。

10世紀後半に書かれた長編小説の『うつほ物語』⁴

には、植物の種類や用いられ方が多岐にわたる文付枝が見られる。今回は、この『うつほ物語』における文付枝の例を眺めることにより、そこから読み取れること、考えられることを纏めてみたい。

【2】『うつほ物語』における文付枝の用例

『うつほ物語』における文付枝は46例あるが、その用いられ方は、A. 添える、B. 書き付ける、C. 実の中に入れる、の3種類に分けられる。

A. 添える (32例)

植物を添える場合には、「折る」「取る」「つける」「さす」という動詞が使われている。添えられている植物は、松の枝、^{あさぢ}浅茅、^{むぐら}葎、^{とこなつ}紅葉、^{なでしこ}常夏(撫子)、^{りんどう}竜胆、梅、山吹、^{おみなえし}女郎花、^{なまみろ}生海松⁵、松の造り枝、五葉の松、^{しおん}紫苑⁶の造り枝、^{やますげ}呉竹、雪のかかった松の枝、桜、藤、桔梗、^{やますげ}山菅⁷であり、非常に多くの種類の植物が用いられていることが分かる。以下に実際の例を挙げ、各場面の簡単な説明も記す。

①忠こそ巻

これを放ちて、妻なき人のよろしくはいづこにかあらむ。恥を捨てていひ出でむと思して、かのおとどの御乳主^{ちぬし}の娘、あやきとて、めでたくかたちある童を使ひたまふ、それにありがたき装束をせさせて、かく聞こえて奉りたまふ。

「このみや浅茅繁きと思へどもまた葎生ほす宿もありとか

同じくは、同じ野にや思し召したまはぬ」とて、をかしき浅茅に御文さしたり。(①213)⁸

一条北の方が、妻を亡くした橘千蔭に思いを寄せており、その思いを歌に詠んでいる。そして、歌の中に「浅茅」が詠まれているが、その浅茅にこの歌を付けて、これをあこきという少女に預けて千蔭に渡すのである。

②嵯峨の院巻

源宰相、志賀に行ひしに詣でたまへりけり。それよりおもしろき紅葉の露に濡れたるを折りて、かくなむ。

わが恋は秋の山辺に満ちぬらむ袖よりほかに
濡るるもみぢ葉
とあれど御返りなし。(①301)

実忠が、あて宮という美しい女性に恋の思いを詠んだ歌を贈っている。歌の中に「濡るるもみぢ葉」とあるこの歌は、露に濡れた紅葉の葉と共に贈られる。

③国^{くに}譲^{ゆづり}上巻

見たまへば、黄ばみたる色紙に書いて山吹につけたるは、真^まの手、春の詩。青き色紙に書いて松につけたるは、草^{くさ}にて夏の詩。赤き色紙に書いて卯の花につけたるは、仮名。(③80)

仲忠が若宮に習字の手本を書いて贈る時に、漢字の手本に山吹、草書の手本に松、仮名の手本に卯の花を添えている。手紙以外にも植物が添えられているという例である。

B. 書き付ける (11例)

植物に直接書き付ける場合には、「書く」「書きつく」という動詞が使われている。用いられている植物は、桜の花びら、菖蒲、藤の花びら、柳、萩、すすき、橘、蓮の花びら、竹の葉、菊、散った花びらである。下はその例である。

④春日詣巻

仏の思さむこと恐ろしく、など思ひ返せども、
せむ方知らず覚ゆれば、散りつる花びらに、爪も
とより血をさしあやして、かく書きつく。

憂き世とて入りぬる山をありながらいかにせよとか今もわびしき (①277)

忠こそが、指の爪から血を流して、その血で、花びらにあて宮への思いを書き付けている。

ところで、「添える」と「書き付ける」ことは、贈り手の気持ちの上で異なるものであったのだろうか。そのような疑問の根拠となった例は、次の⑤と⑥である。

⑤春日詣巻

かの仲忠の侍従、内の御使に、水尾といふところに詣でて帰るに、をかしき松に面白き藤のかかれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらにかく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色
をだに見で
かくなむとだに」とて、(後略) (①280)

仲忠は、水尾からあて宮に詠むにあたり、藤が巻き付いている松を枝ごと折って、その藤の花びらに歌を書き付けている。そして歌の中にも「藤の花」を詠んでいる。

⑥祭の使巻

侍従、龍胆^{りんだん}の花押し折りて、白き蓮^{はちす}の花に筭^{かうがい}の先して、かく書きつけて奉る。

「浅き瀬に嘆きて渡るいかだ師はいくらのくれかながれ来ぬらむ (後略) (①504)

仲忠は、龍胆の花を折り、白い蓮の花に筭の先を使って歌を書き付け、それをあて宮に贈っている。

⑤と⑥では、植物を折ってそれを添えるものとした上で、さらに他の植物を選んでそこに歌を書き付けているのである。

そこで、「書き付ける」例11例を検討すると、まず、いずれも恋の思いを訴える歌であることが分かる。また、11例の内10例が、あて宮を思う男性達からあて宮に贈った歌であること、さらに、これらはあて宮の東宮への入内が決まる前に詠まれ、贈られているということに気付く。杉野恵子氏は、花びらや葉に歌を書くという表現そのものは『伊勢物語』をはじめとする歌物語に既に現れていたが、そこに恋の歌を書くことは『うつほ物語』独自の用法であったということ述べておられる¹⁰。そして、「書き付ける」の11例の内7例が、実忠・忠こそ・仲忠・仲頼・三宮・仲澄・藤英の7名が初めてあて宮に書いて贈る歌であることを指摘しておられる。

以上より、『うつほ物語』において「添える」と「書き付ける」は意図的に区別されている可能性が考えられる。

C. 実の中に入れる (3例)

実をくり抜いて中に和歌を入れる場合には、「書き入れる」という動詞が使われている。使われている実は栗、橘、柑子の3つであるが、これらはいずれも次の⑦の場面に見られる。

⑦蔵開中巻

(前略) 栗を見たまへば、中を割りて、実を取り

て、^{ひはだ}檜皮色の色紙に、かく書いて入れたり。

行くとても跡をとどめし道なれどふみ過ぐる
世を見るが悲しさ

とあり。もののたまはで、橘を見たまへば、それも実を取りて、黄ばみたる色紙に書き入れたり。

いにしへの忘れがたさに住み馴れし宿をばえ
こそ離れざりけれ

柑子を見たまへば、赤ばみたる色紙に書いて入れたり。

結び置きてわがたらちねは別れにきいかにせ
よとて忘れ果てしぞ

とあるを見たまひて、涙雨のごとく降らしたまふ。(⑤509)

仲忠が父兼雅の妻達が住む一条邸を訪ねた時、その妻達は兼雅の訪問が久しく途絶えていることを嘆く歌を詠み、それを栗、橘、柑子の実の中に入れて仲忠に投げつける。この場面は、『晋書』巻55・列伝第25に収められている潘岳の故事に拠っていると考えられている。その故事とは、潘岳という美しく立派な男性が洛陽の街を通る時、そこにいた女性達から果物を投げられたというものである¹¹。

この⑦のように、実の中に入れるという文付枝の用いられ方は非常に珍しいものである。

【3】『うつほ物語』の文付枝と『源氏物語』の文付枝

前節において、『うつほ物語』の文付枝がどのように用いられているのか眺めてみたが、『うつほ物語』より約50年後に書かれた『源氏物語』では、文付枝はどのように用いられているのだろうか。

調べてみると、「添える」例及び文付枝のみを贈る例は41例であり、「書き付ける」例はたった2例である。そして「実の中に入れる」例は見られない。つまり、『うつほ物語』の方が、文付枝の用いられ方が種類に富んでいると言えるのである。

田中仁氏は、『源氏物語』における「書き付ける」例の数が『うつほ物語』に及ばないことを指摘され、『うつほ物語』は料紙の趣向が多彩であると述べておられる¹²。また、『うつほ物語』の文付枝には季節はずれのものもあるのに対し、『源氏物語』のそれは「和歌的な季節に縛られて」おり、さらに、料紙の色は、『うつほ物語』では文付枝と関連することが多く、『源氏物語』では和歌の言葉に関連することが多いと論じておられる。金氏は、前掲論文において、『うつほ物語』の文付枝は「作品との関連が少なく、消息の内容

やその場の心理状況、受け手と贈り手の人物のあり方とも深い関連がない」とされ、「作中人物の内面の心情を表し、物語展開の重要な要素とはなりえず、文付枝の視覚的、外面的方面が重視され、その点は克明詳細に描写されているのである」と述べておられる。また、『源氏物語』では文付枝を通して「その場の状況と贈り手の教養、風雅などを窺うことができ」、その文付枝は「贈り手と受け手との間に洗練された私的対話を成立させるとともに、登場人物の教養や情趣など言葉では言い表せない部分まで表現できる独立した表現手段として機能している」と纏めておられる。

両氏の論では、『うつほ物語』の文付枝について、季節はずれのものもあること、和歌の内容よりも料紙の色との関わりが深いこと、登場人物の内面を示すものではないということが指摘されており、一方『源氏物語』の文付枝については、和歌の内容や季節と深く関わっていること、登場人物の教養を表すものであるということが指摘されている。確かに『うつほ物語』には、⑥や⑦のように、和歌の内容と全く関係のない文付枝も見られる。そして『源氏物語』には、当時存在していた歌を踏まえた歌を詠み、さらに、その踏まえた歌に詠まれている植物を文付枝として添えるという、イメージの世界を何層にも重ねるような巧みな用いられ方の文付枝が見られる¹³。『源氏物語』のこのような点と比較すれば、『うつほ物語』の文付枝の用いられ方は未熟であると言えるかもしれない。しかし私は、【2】で示した『うつほ物語』の文付枝の様々な用いられ方から読み取るべきことは、大いにあるのではないと思う。

【4】終わりに

最後に、『うつほ物語』における文付枝の特徴やそこから考えられることを纏めてみたい。

まず、習字の手本に花を添えるという、一般的な文付枝とは異なる用いられ方が見られた。また、「書き付ける」例11例の内の10例があて宮へのものであるということは、注目すべきことであると思う。あて宮は、多くの男性から思いを寄せられ、その思いを打ち明けられる中で、東宮への入内が決まる。「書き付ける」例の歌が、その入内の決まる前に詠まれていることから、ここでは、相手を慕う気持ちを伝える際には「書き付ける」方法が最もふさわしいとされていることが考えられる。そして、「添える」と「書き付ける」の間には意識的な使い分けがあることも浮かんできた。それから、実の中に和歌を入れるという、文付枝の用いられ方として極めて特異な例も見られた。こ

れが本当に晋の故事を踏まえているとすれば、『うつほ物語』の作者はその故事を単に故事として取り入れるに留まらず、和歌の贈答の手段に転じさせたということが言える。

これらより、和歌の贈答の形式に対する強いこだわりが窺える。言い換えれば、相手に自分の気持ちを伝える時、その気持ちをどのような形にして伝えるか、ということに関心が持たれていたと言える。このように考えると、当時、和歌に形を与えて、詠んだ思いを客観的に見つめよう、或いは、可視的な空間として捉えよう、という考えがあったのではないか、という思いに至る。『うつほ物語』の文付枝は、その考えを物語っていると言っていることができるだろう。

〈参考文献〉

*執筆者の五十音順、敬称略。

- ・金英「平安朝における文付枝研究——『枕草子』を中心に」(博士学位論文) 平成13(2001)年度
- ・金英「折枝と文付枝——枕草子「せちは」段新見——」『国文』第94号、2001年1月
- ・小松茂美『岩波新書977 手紙の歴史』岩波書店、1976年9月
- ・杉野恵子「花びらや葉に歌を書く(書きつく)」という表現について——「うつほ物語」を中心に——『実践教育』第19号、2000年3月
- ・鈴木裕子「「折り枝」という情報——『源氏物語』の贈答場面から——」『日本文学』第50巻第10号、2001年10月
- ・田中仁「「書きつく」の意味——宇津保物語を主な資料として——」長谷川孝士教授退官記念論文集刊行委員会・中洲正堯『長谷川孝士教授退官記念論文集 言語表現の研究と教育』三省堂、1991年3月
- ・田中仁「源氏物語の手紙」今井卓爾他『源氏物語講座 第七巻 美の世界 雅びの継承』勉誠社、1992年12月
- ・田中仁「『うつほ物語』の贈り物と手紙」『親和国文』第41号、2006年12月

注

- 1 『源氏物語』末摘花巻に「手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書い給へり。見るかひなううちをき給ふ」とある。上の引用は、『新日本古典文学大系』(全5巻、柳井滋氏他校注、岩波書店、2005年5月から2007年2月)による。
- 2 和歌や手紙に添える植物を「折枝」と呼ぶ先行研究が多くあるが、金英氏は「折枝と文付枝——枕草子「せちは」段新見——」(『国文』第94号、2001年1月)や「平安朝における文付枝研究——『枕草子』を中心に」(注

3参照)において「折枝」の用例を検討され、「折枝」とは織物や刺繍での植物の模様を指すものであるということ論じておられる。

- 3 博士学位論文、平成13(2001)年度。
- 4 応和年間から永観元年(961~983)頃に書かれたとされる仮名物語で、『源氏物語』に先立つ長編小説。全20巻。作者は未詳だが、^{みなもと(の)したこう}源順と考えられている。
- 5 海藻のこと。
- 6 キク科の多年草。秋に淡紫色の花が咲く。
- 7 ヤブランのこと。ユリ科の常緑多年草。夏から秋にかけて、淡紫色の小さな花が穂状に咲く。
- 8 『うつほ物語』の引用は、全て『新編日本古典文学全集』(全3巻、中野幸一氏校注・訳、小学館、2004年12月)による。()内は順に巻数、頁数。
- 9 髪を整える為に使用した箸状の道具。
- 10 「花びらや葉に歌を書く(書きつく)」という表現について——「うつほ物語」を中心に——(『実践教育』第19号、2000年3月)。
- 11 本文は「岳美姿儀、辞藻絶麗、尤善為哀誄之文。少時常挾彈出洛陽道婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果遂満車而歸」。上の引用は、『晋書』(中華書局)による。
- 12 「源氏物語の手紙」(今井卓爾他『源氏物語講座 第七巻 美の世界 雅びの継承』勉誠社、1992年2月)。
- 13 例として、『源氏物語』野分巻の、夕霧が雲居雁に歌を詠む次の場面が挙げられる(引用は注1に示したテキストによる)。

風さはぎむら雲まがふ夕にもわするゝまなくわすられぬ君
吹き乱れたる刈萱につけたまへれば、人へ、^{かるかや}「交野の少将は、紙の色にこそとゝのへ侍りけれ」と聞こゆ。

この場面について、鈴木裕子氏は、次の歌などが踏まえられていると考えておられる(「「折り枝」という情報——『源氏物語』の贈答場面から——」『日本文学』第50巻第10号、2001年10月)。

- ・『古今和歌六帖』
わりなくておもひみだるるかるかやのあだなる君がうしろめたさに(3010)
- ・『是則集』
しもがれのあさぢがもとのかるかやのみだれてものをおもふころかな(30)
- ・『大斎院御集』

なかつかさ、いとまにてひさしくまゐらねば、
かるかやにつけて、中將
あかぬまで秋のはてにもなりぬればおもひみだるるのべのかるかや(123)
かへし
みだるるながめまじらぬかるかやはあきのゆくらむこともしられず(124)

なお、上の歌集の引用は、全て『新編国歌大観』による。()内は歌番号。

高橋 秀子：平安時代の和歌の贈答について

たかはし ひでこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 博士前期課程 比較社会文化学専攻
日本語日本文学コース 1 年